20232年1月24日(火)10:30～11:30
会場:アレセイア湘南　中高　ロビニア・ホール
平和学園宗教委員会
学園長　藤本　朝巳

主題「大切なものは何か」**第3回「聖書に親しむ会」**

はじめに

黙祷をもって

賛美歌:484　主われを愛す　2節のみ

聖書:ヨハネによる福音書　3:16－21　新約聖書　169ページ

16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。 17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。 18 御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。 19 光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。 20 悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。 21 しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」

今回テーマ「キリスト教と児童文学」

ファンタジー児童文学を楽しむ ―『ライオンと魔女』を通して ―

※ この物語の主人公は誰でしょうか？

エドモンド。悪いことをしてしまった彼の再生の物語とも読むことができる。

※ 人はいかにして、絶たれてしまった人間関係を修復できるのでしょうか？

アスラン(ライオン)→イエスキリスト
↳自らの力をつかって魔女をやっつけるのではなく命をささげて、愛する人を救う。
ライオンと魔女のなぞを解く。

懇　談

お祈り:学園宗教主任　鳴坂 明人　先生

反主流の文学として『ライオンと魔女』を読む

文学部教授　藤本 朝巳

昨今のファンタジー人気は驚くばかりです。世界中で、老若男女の区別なく親しまれ、また映像化されたアニメやフィルムも大流行りです。しかし、ファンタジーは、本来の、あるべき姿で読まれているのでしょうか。

ファンタジー文学は、伝統的な主流の文学に対し、いわゆる反主流の文学として起こりました。当然、読者の多くは主流の文学の読み手（一般的に男性、恵まれた地位、教養があり、豊かで社会組織の中心にいる者）ではなく、主流からは外れた読み手（女性や子ども、恵まれない地位に置かれ、教養がないとされ、貧しく、社会組織の端にいる者）でした。これらの読者は弱者の立場からものごとを考える人であり、男性中心の社会から外れた「他者」として読む人だったのです。

ところで、昨今、不可解な出来事が多発しています。例えば、地球温暖化。自然がおかしくなれば、人間も変調をきたすに違いありません。子どもを取り巻く状況も日に日におかしくなってきています。身の回りを眺めても、危ないことがたくさん起きています。しかも、家庭内外には娯楽が満ちあふれ、携帯電話やコンピュータは必需品となり、私たちは、いつでも、どこでも、いとも簡単に何でもできるような錯覚に陥っています。世の中は一見便利で、楽しくて仕方がないような感じがします。しかし、人の世は人工的には華々しく照らされていながら、精神的には、恐ろしい「闇」に閉ざされているのではないでしょうか。

このような時代だからこそ、人はファンタジーを求めるといえます。ファンタジーは驚異の出来事が起こる世界です。そこでは不可能が可能になり、悪しき者が成敗され、正しき者が報われます。男性中心の価値観は覆され、これまで排除され、抑圧されてきた者（女性、子ども、階級的、民族的に差別されてきた人々など）が社会の意識に上ります。それゆえ人々は、それが大量生産の空想物語とわかっていても、そこにヒーロー（英雄）を求め、従来の文学形式のしきたりにとらわれない奇想天外な展開を求めるのです。このような時代、人は心底、探索の旅に出たいと願い、救出してくれる英雄を求め、あり得ないことが起こることを夢見るのです。

アスラン（ライオン）→ イエス・キリスト、

アメリカの民俗学者 D. L. アシュリマンは、

> 人は語ること、聞くことによって恐れや欲求不満を解消し、また閉ざされた状態にある時も、物語が人に希望や夢を与え、さらに人の進むべき道を示す。また何よりも物語は人を楽しませる、

と述べています。

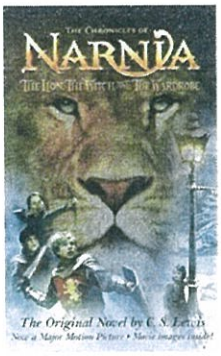
『ライオンと魔女』はナルニアシリーズ七冊の最初の作品で、舞台設定、登場者の性格づけ、道具の使い方、ファンタジーの仕掛けなど、どれをとってもすぐれた、楽しめる作品となっています。物語では、四人の兄弟姉妹がナルニアという異世界に迷い込み、邪悪な魔女を倒し、悪に支配されていたナルニアを回復します。おもしろさは、この善と悪の戦いにあるのですが、作者ルイスの描いた英雄は、悪を力で倒すヒーローではありませんでした。すなわち、この英雄は究極の愛として、自らを犠牲にする英雄でした。ここに、作者ルイスが意図した「痛み」の問題が語られています。この物語が単なるエン

思いこんでしまう人間の代表。

ターテイメントではなく、エドマンドの裏切りと改心がテーマになっていることは明らかです。そして作品がファンタジーとして成功しているのは、反主流の文学としての特質を備えているからなのです。

付記すべきことは、ルイスが物語を語る際、重要と考えたことが、聖書を寓意化し、教えを伝えることではなかったということです、彼が大切にしたことは、イメージした物語を盛る器でした。それが“フェアリーテール”という形式だったのです。彼は、この伝承の枠組みに、摩訶不思議な出来事を入れることによって、物語の対象を大人、子どもの区別なく書くことをなし得たのです。

『ライオンと魔女』の中で、最も美しいと思われる場面は第二章のフォーンの改心の物語です。ナルニアの小市民であるフォーンは、最初は魔女を恐れ、ルーシィを魔女に引き渡そうとしました。しかし、彼は悔い改め、ルーシィに罪を告白し、赦しを乞い、ルーシィとフォーンは一緒に再出発します。人は罪を犯しても、我が罪を覚え、悔い改めるなら、神の愛によって赦され、再び正しい道を歩むことが許される。「改心」と「赦し」、そして神への「信頼」こそが、この物語を気高い作品にしているといえます。



『ライオンと魔女』

20年前と今とまったく変っていない。人の進歩はあてにならない。

児童文学と平和－『ライオンと魔女』を通して　今現在、世界の各地で戦争が行われているが、過去の第一次、第二次世界大戦は、人類史上もっとも悲惨な世界戦争体験であった。世界各地の戦場で多くの人々が戦死し、また空爆などで驚くべき数の一般市民も亡くなった。もちろん歴史を遡れば、伝染病や自然災害で一挙に多くの人々が死亡することはあった。しかし、この悲惨な戦争は、人々の「死」と「苦しみ」に対する恐怖感を強め、人の欲や罪深さという事実に対する認識を一変させた出来事であった。

大戦後、さまざまな国々で戦争の酷さを描いた作品も数多く描かれたが、戦争を起こしてしまう人間の罪深さとその罪は贖わなければならないということは、特に児童文学では重要なことと見なされた。

イギリスのC.S.ルイス（Clive Staples Lewis 1898 –1963）は、彼自身、第一次世界大戦に従軍しており、戦争の非人間的な酷さを実際に体験した人物である。彼は1950年、7作のシリーズになる「ナルニア国ものがたり」の出版を始めた。この物語シリーズは、もちろん、その刊行の目的は第一に読者を楽しませることにあるが、一方で、ルイスには確かな意図があったに違いない。ここでは第一作の『ライオンと魔女』[1] について、彼の意図を記したい。

---

[1] Lewis, Clive Staples. *The Lion, the Witch and the Wardrobe, A Story for Children*, Geoffrey Bles, London:1950　なお、シリーズは7冊になり、最後『さいごの戦い』（*The Last Battle*）は1956年に出版されている。

フェアリーテール ≒ 童話 ≒ 昔話 であると考えられる。

『ライオンと魔女』は四人の兄弟姉妹がナルニアという異世界に入り、白い魔女（悪の権化）を打ち倒し、ナルニアに平和と安全を取り戻す物語である。しかし、ルイスは武力によって悪を倒すということを中心に描いたのではない。むしろ、物語に登場するアスランというライオン（イエス・キリスト）が自らの命を捧げることによって、そして死から復活することによって、すなわち、その贖いを通して罪を犯した少年エドモンドが悔い改めること、新しい生き方をしようと生まれ変わることが重要なメッセージとなっている。

ところでルイスは、さまざまな機会に、この物語はキリスト教のアレゴリーとして描いたものではないと述べてはいるが、物語そのものは、明らかにアスラン（イエス・キリスト）の贖いの「死」と「復活」を通して、人の罪を贖うことを描いているといえる。（ルイスは他にも児童文学作品などを執筆しているが、彼の児童向けの著作内容の動機や目的を知るには、彼の宗教著作集を読むことでより理解できる。）[2]

ファンタジーはその源を太古の世界にさかのぼり、伝承文芸と深いつながりがある。アメリカのフォークローリスト（民俗学者）、D．L．アシュリマンは、その著書『フォーク＆フェアリーテール』[3] で、以下のように述べている。

> 地球上では、あらゆる社会、すべての時代に、おはなしが語られてきた。あるものは口承で、また宗教的な儀式の一部として、あるものは教育上、そして純粋にエンターテイメントとして語られてきた。このような物語は、わずかな例外を除いて、つきつめると二つに分類できる。一つはフィクションと認められる物語である。すなわち、それはファンタジーの所産であり、新しい世界を創造するものであり、作られた話である。それゆえ、伝承の物語は私たちのフラストレーションや恐れを解消することができるし、また希望や夢を見渡せる高台となるものでもある。もう一つは、教示する物語であるが、その目的は楽しませるためのものである。（翻訳は筆者による）

違う世界で得た視点（俯瞰観）で、もどってきた現実世界の見方が変る。

このことばから、人が物語を語り続けてきたことの理由を了解できる。人は生きるために物語を作り、語り、伝承し、大切なことを教える（教育する）ことが必要だったのである。しかし、ルイスの紡ぎ出したファンタジー物語が児童文学としてふさわしい物語であったのには以下のような理由があると思われる。（中略）

ファンタジーは驚異の出来事が起こる世界である。そこでは不可能が可能になり、悪しき者が成敗さ

---

[2] 『悪魔の手紙』、C.S.ルイス宗教著作集 1 各新教出版社 *The Screwtape Letters*, 1942.　他のシリーズは以下のとおりである。

『四つの愛』、同著作集 2 *The Four Loves*, 1960.

『痛みの問題』、同著作集 3 *The Problem of Pain*, 1940.

『キリスト教の精髄』、同著作集 4 *Mere Christanity*, 1952.

『詩篇を考える』、同著作集 5 *Reflections on the Psalms*, 1958.

『悲しみを見つめて』、同著作集 6 *A Grief Observed*, 1960.

『神と人間との対話』、同著作集 7 *Letters to Malcolm*, 1964.

『栄光の重み』、同著作集 8 *"The World's Last Night" and Other Essays*, 1960.

『偉大なる奇跡』、同著作集 別巻 1 *God in the Dock*, 1970.第 1 部

『被告席に立つ神』、同著作集 別巻 2 *God in the Dock*, 1970.第 2 部・第 3 部

[3] Ashliman, D. L. *Folk and Fairy Tales - A HANDBOOK,* London: Greenwood Press, 2004.

れ、正しき者が報われる。また男性中心であった価値観は覆され、これまで排除され、抑圧されてきた、女性、子ども、また階級的、民族的に差別されてきた人々などが解放されることを一般民衆は願ったのである。それゆえ人々は、それが大量生産の空想物語とわかっていても、そこに悪しき者を成敗するヒーローを求め、リアリティの文学形式のしきたりにとらわれない奇想天外な展開を求めたのである。このような時代、人は心底、自分とは何かを探し求め（探索の旅）、また自分たちを救出してくれるヒーローを待ち望むのである。ルイスの物語は、こうした時代の要求に合致し、子どもにも理解できる物語として受け入れられたといえる。そして、物語の中心となる主題は「死」と「復活」であった。繰り返しになるが、『ライオンと魔女』のテーマはアスランの十字架である。そして、十字架とは「父なる神の究極の愛」である。

ところで、『ライオンと魔女』は『ナルニア国物語』シリーズ七冊の最初に出版された作品で、内容の深さ、登場者の性格づけ・描写、舞台設定、大小道具の使い方、ファンタジーとしての仕掛けなど、どれをとっても七冊中で最もすぐれた作品であるといえる。物語は、四人の兄弟姉妹のわくわくどきどきする冒険の展開を追うだけでも十分に楽しむことができる。そしてアスランの権威、その行為（犠牲）は、キリスト教と結びつけなくとも、読者を十分に感動させる。

しかし、ここで、あえてこの作品をイエスの教えの寓話（アレゴリー）として読むことの意味を述べてみたい。アスランはイエスの象徴である。アスランが十字架を表すからこそ、この作品には深い意味があるといえる。ところが、作者ルイスは「『ライオンと魔女』はそもそも、雪の森を傘と包みをもって歩いているフォーンの絵ではじまった･･･はじめのうちは、物語がどう進展するか、はっきりした考えなどほとんどありませんでした」（p.73-74）と述懐している。ライオンにしても、「そのころ、私はライオンの夢をずいぶんみていた」[4] から、ライオンを登場させたにすぎないと語っている。このことばを信じるなら、ルイスは、このシリーズをキリスト教のアレゴリーとして、幼い読者向けに書いていくつもりではなかったといえる。

彼は子どものころ、神について、キリストの苦難について、こう感じなければいけないといわれたとたんに、そう感じるのが難しくなったと独白している。彼は子どものころ、教会学校の教条的なあり方をひどく嫌っていた。事実、思春期にキリスト教から離れ、後に信仰を回復するのは、さまざまな書物や友人との交わりを経て三〇歳を越えてからであった。

彼のファンタジーが子ども読者に愛される理由は、まさにこの経緯から推察できる。もしルイスが、聖書を寓意的に物語化し、教えを伝える目的で書いていたとしたら、子ども読者は、幼いころのルイス同様、物語をこれほど好きにはなれなかったに違いない。

さて、ルイスの物語の作り方において重要なことは、彼がイメージした物語を盛る形式であった。彼が「作家としての私は、自分が発表したいと思っている素材を用いて表現するに、フェアリーテールが理想的な形式に思われた」と述べているように、彼の用いた形式がフェアリーテールであったということが重要なことなのである。すなわち彼は「ファンタジーや神話は、ある読者にとってはあらゆる年齢において読むに耐える形式です…正しく用いられ、然るべき読者にめぐり会うなら、それはあらゆる年齢の読者に対して同じ力をもつ…単なる概念とか、個々の経験でなく、ありとあらゆる経験を人の感知しうる形で示す…」(p.67)[5] と記している。上記の文章のとおり、ルイスは対象としての読者を、大人、

---

[4] Edited by Walter Hooper, *Of Other World Essays and Stories*, London: Bles, 1966.

[5] 注 10　同書

子どもの区別なく物語を書いており、そして読者に、それまで味わったことのない深い経験をして欲しいと願っていたのである。

この作品の魅力は何といってもナルニア国にある。物語は四人の兄弟姉妹が、偶然にナルニアという異世界に入り込み、悪い魔女を倒し、ナルニアを回復する。しかしこの作品の隠れた、そして重要なテーマはエドマンドの裏切りと改心にあるといえる。エドマンドは子どもらしい形で悪に手を染めてしまう。兄弟姉妹の中で三番目という位置。どう頑張っても上の二人には知恵や力においてかなわない。また一番下の妹は末っ子でみんなに特別にかわいがられる。中途半端な位置にいる彼は、何とかして兄姉妹を出し抜いて一番になりたかったのである。こうした心情は、子ども読者にもよく理解できることである。

また、彼は魔女の差し出す Turkish Delight という甘いお菓子に惑わされ、さらに調子の良いことばに騙されてしまう。彼は嘘をつき、つじつまを合わせ、自己中心な行動を兄姉たちのせいにし（責任転嫁）、失踪し、結果的に善意の人々を裏切ってしまう。彼は誘惑され、栄誉を求めるという罪に躓いたのである。

しかし寒い中で外套もなく、みじめになり、初めて事の重大さを知ることになる。エドマンドは、魔女がナルニアの住人を石に変えようとすると、「やめてください」と叫び、魔女になぐられてしまう。彼はそこに至って、自分以外のものをかわいそうに、気の毒に思うのである。その後、彼は縛られ、鞭を与えられる。死を持つだけの彼を魔女から救えるのは、アスランの犠牲しかなかったのである。ここにルイスが、人が改心するに重要としていた「痛み」の問題が語られている。

ファンタジーには隠された意味がある。適切なファンタジーはおもしろいだけでなく、「すべてはうまくいく」と、安心させる力も秘めている。それゆえ、この作品を楽しみ、心を動かされた読者は、それを神の恩寵と自然に感謝して受け入れることができるのである。

作者　C・S・ルイス（C.S.Lewis） 本名**クライブ・ステープルス・ルイス**（Clive Staples Lewis, 1898年－1963年）は、イギリスの学者、小説家。ベルファスト生まれのアイルランド人。フルネームは他に Clive Staples "Jack" Lewis。

生涯　北アイルランドのベルファストに弁護士の子どもとして生まれる。子ども時代は3歳上の兄ウォレンと一緒に『ボクセン』と言う想像の国を作り、その物語を書いて遊んだ。パブリック・スクールに馴染めず、カークパトリックという学者の個人教授を受けて、オックスフォード大学ユニヴァーシティ学寮に進学、古典語、英文学にて最優等を取る。

第一次世界大戦に従軍後大学に戻り、モードリン学寮で英文学特別研究員を勤め、そこで世界的に有名な『指輪物語』の作者 J・R・R・トールキンと知り合う。その後 1954 年にケンブリッジ大学に移り、中世・ルネッサンス英文学の主任教授を務める。

第二次世界大戦後、ルイスの愛読者であり離婚歴のあるアメリカ人の詩人ジョイ・デイヴィッドマン・グレシャムと知り合い、1956 年に結婚する。この結婚は当初、ジョイが英国籍を取得するための形式的なものであったが、後に彼女が骨髄癌に侵されたことを契機に深まった。ジョイとのストーリーは戯曲『シャドウランズ』（*Shadowlands*）およびその映画化作品『永遠の愛に生きて』（*Shadowlands*）で描かれ、広く知られるようになった。『永遠の愛に生きて』　『ナルニア国ものがたり』などで知られる作家 C・S・ルイスの物語。彼はオックスフォードで文学を講じ、また、キリスト教研究でも名高い、現代の賢者とも呼べる高潔な人物。象牙の塔に篭り、退役軍人の兄と二人暮らしの彼は、女性とはほとんど没交渉の生活を送っていた。ある日、彼のファンだというアメリカの女性詩人ジョイ・グレシャムの訪問を受け、彼はその大らかで自立した意識に戸惑いつつも次第に彼女に惹かれていく……。

1963年、大学を定年退職した年に亡くなる。

信仰と著作

幼少の頃はキリスト教信仰を持っていたが、14歳の時に一度無神論に陥った。その後様々な書物や大学時代の友人の影響を受け、31歳の時にキリスト教信仰を取り戻し、『奇跡』、『悪魔の手紙』、『キリスト教の精髄』、『喜びのおとずれ』などの神学書や自叙伝を通し、一平信徒としてキリスト教信仰を伝えている。

著作には詩集、神学論文集などがあるが、特に有名なものは『ナルニア国ものがたり』全7巻である。神学者としても著名で、『ナルニア国ものがたり』にもその片鱗が現れている。

1936年『愛とアレゴリー』でホーソンデン賞、1957年に『さいごの戦い』でカーネギー賞を受賞している。

ナルニア国ものがたり（The Chronicles of Narnia）出版順

1. ライオンと魔女（1950年）
2. カスピアン王子のつのぶえ（1951年）
3. 朝びらき丸 東の海へ（1952年）
4. 銀のいす（1953年）
5. 馬と少年（1954年）
6. 魔術師のおい（1955年）
7. さいごの戦い（1956年）

年代記（Chronicles）としては	
魔術師のおい	6.
ライオンと魔女	1.
馬と少年	5.
カスピアン王子のつのぶえ	2.
朝びらき丸 東の海へ	3.
銀のいす	4.
さいごの戦い	7.

別世界物語

1. マラカンドラ 沈黙の惑星を離れて
2. ペレランドラ 金星への旅
3. サルカンドラ かの忌わしき砦

その他小説

- 天国と地獄の離婚（*The Great Divorce*）
- 愛はあまりにも若く プシュケーとその姉 （*Till We Have Faces: A Myth Retold*）

宗教著作集

- 悪魔の手紙　(C.S.ルイス宗教著作集 1)
- 四つの愛　(C.S.ルイス宗教著作集 2)
- 痛みの問題　(C.S.ルイス宗教著作集 3)
- キリスト教の精髄　(C.S.ルイス宗教著作集 4)
- 詩篇を考える　(C.S.ルイス宗教著作集 5)
- 悲しみを見つめて　(C.S.ルイス宗教著作集 6)
- 神と人間との対話　(C.S.ルイス宗教著作集 7)
- 栄光の重み　(C.S.ルイス宗教著作集 8)
- 偉大なる奇跡　(C.S.ルイス宗教著作集 別巻 1)
- 被告席に立つ神　(C.S.ルイス宗教著作集 別巻 2)

評論

- 愛とアレゴリー：ヨーロッパ中世文学の伝統（*Allegory of Love* ）
- 廃棄された宇宙像：中世・ルネッサンスへのプロレゴーメナ（*The Discarded Image:An*

——

映画版『ライオンと魔女』

さて、聖書に親しんでいる人であれば、映像化された映画は、一般的には、わかりにくい展開かもしれません。事実、学生の一人が「アスランは生き返ることがわかっていて魔女を騙したのだからずるい…そんなことをしないで、はじめから魔女を倒せばいいではないか」と不満をもらしたことがあります。

さて、映画を見た感想をいえば、原作をかなり変えていることは事実です。例えば、「…映画では、登場人物たちの動機や彼らをとりまく基本的な状況に変更が加えられ、子どもの物語らしい要素が少なくなっている。これは巨額の資金をつぎ込んだ大型映画であって、子どもの観客だけでなく、家族連れでない大人の観客の動員も意図されているため…」[1] と述べる研究者（岸野あき恵）もいます。論者はまた、アスランの位置づけが原作より低くなっていることを指摘しています（「…映画では復活後の Aslan の活躍するプロットが縮小されて戦闘場面がメインとなったため、さらに登場場面が少なくなっている」）。さらに論者は「原作発表時から五〇年以上が経った現在、宗教に対する現代人の嗜好は変化しており（？）、キリスト教徒ではない人に対する配慮も必要である…原作からキリスト教色を抜いて万人向けの映画を作ろうとすれば、当然物語には大幅な変更が生じる…その埋め合わせに、家族愛や責任感、勇気などが中心テーマとして強調され、家族再生の物語になった…」〔（　）内は筆者〕と述べています。

現代映画は高度の技術を用いて製作されており、見事なまでに舞台や登場者を動かします。リアルな戦闘シーンは迫力満点、映画『ライオンと魔女』は娯楽映画としては高い評価を与えることが可能です。しかし原作の深さ、精神性は消えてしまったといわざるを得ません。

ファンタジーは、願いをかなえる

伝承の物語（fairy tale）は名前もなき語り手に源を発し、世代をこえて語り継がれてきました。話が生き延びるには、聞く人を満足させる必要がありました。楽しませることのできない物語は、すぐに消え去ったのです。

しかし、昔の人は厳しい自然の中で生き抜くための、真剣な思いをこめて語ったのです。物語に恐れや困難を解決し、生き抜く知恵があったからこそ、個人の、また社会の必要性を満足させたのです。

ファンタジーには隠された意味があります。適切なファンタジーはおもしろいだけでなく、「すべてはうまくいく」と、安心させる力も秘めています。素朴な人々は、それを神の恩寵と感謝して受け入れたのです。

---

[1] 岸野あき恵　「喜びの失われたナルニア－映画 *The Lion, the Witch and the Wardrobe* に関する一考察」日本イギリス児童文学会 論文集　TINKER BELL No. 53 March, 2008.

『ライオンと魔女』ノート（講義用）

Ｃ．Ｓ．ルイスについて

キリスト教の象徴について
　十字架による贖い
　そこへ行き着くまでの聖書の記事
　復活　よみがえり

作品の構成
　筋
　構造
　ファンタジーの型　（行きて帰りし物語）

時間・空間について
　時間のずれ
　空間移動

登場者について
　アスラン
　兄弟姉妹
　先生－館－教育

悪について
　特に、エドモンドの裏切り
　子どもと悪
　罪について－石に変えられるとは？

　雪の魔女の存在

他の作品・著作について

翻訳について

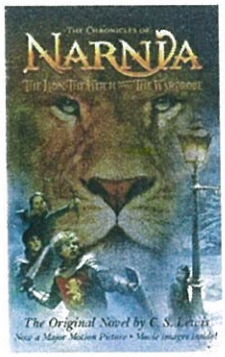
Chapter I

LUCY LOOKS INTO A WARDROBE

Once there were four children whose names were Peter, Susan, Edmund and Lucy. This story is about something that happened to them when they were sent away from London during the war because of the air-raids. They were sent to the house of an old Professor who lived in the heart of the country, ten miles from the nearest railway station and two miles from the nearest post office. He had no wife and he lived in a very large house with a housekeeper called Mrs. Macready and three servants. (Their names were Ivy, Margaret and Betty, but they do not come into the story much.) He himself was a very old man with shaggy white hair which grew over most of his face as well as on his head, and they liked him almost at once; but on the first evening when he came out to meet them at the front door he was so odd-looking that Lucy (who was the youngest) was a little afraid of him, and Edmund (who was the next youngest) wanted to laugh and had to keep on pretending he was blowing his nose to hide it.

As soon as they had said good night to the Professor and gone upstairs on the first night, the boys came into the girls' room and they all talked it over.

"We've fallen on our feet and no mistake," said Peter.



『ライオンと魔女』

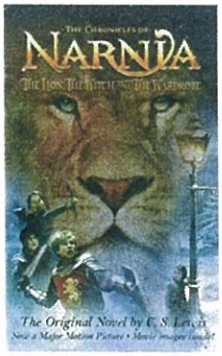
第 1 章

ルーシィ、衣装だんすをあけてみる

むかし、ピーター、スーザン、エドマンド、ルーシィという四人きょうだいの子どもたちがいました。この物語は、その四人が、この前の戦争（第二次世界大戦）の時、空襲をさけてロンドンから疎開した時に起こったことなのです。きょうだいは、片田舎に住むある年よりの学者先生のお屋敷に送られたのですが、そこは、もよりの駅から十五キロ、もよりの郵便局からでも三キロもはなれたところでした。先生には奥さんがいません。マクレディさんという家政婦と三人の召使さんといっしょに、たいそう大きな屋敷に住んでいました。（召使さんの名は、それぞれ、アイビー、マーガレット、ペティといいますが、このお話にはあまり出てきません。）先生は、頭はもとより、顔まで、もしゃもしゃの白髪でうまった、とても年とった人です。しかし、四人とも会ったばかりですぐ、この先生が好きになりました。でも子どもたちが来たその日の夕方、四人を迎えに玄関に出てきた先生が、あまり風変りなようすなので、いちばん年下のルーシィはすこしばかり怖がりましたし、そのすぐ上のエドマンドのほうは、笑いたくて笑いたくて、それをかくすのに、鼻をかむふりをしていなければならなかったほどでした。

先生におやすみなさいをして、その晩、二階にあがってから、すぐに男の子たちは、女の子の部屋へはいってきて、みんなでこんな話をしました。

「ぼくたち、まったく、ついてるよ。」と、年上のピーターがいいました。



『ライオンと魔女』